

終わりのなき進化の果てに

～魔物つ娘と歩む異世界冒険紀行～

淡雪 融

Yu Awayuki

オルバ

ベテラン冒険者で、斧使い。
エスティアとパーティを
組んでいる。豪快で酒好き。

エレーネ

レン德里ックの母親。アドベンチャー
好きで、レンのよき理解者でもある。

パブロ

レン德里ックの父親。元冒険者で、
現在は辺境ロイム村の領主。

ヴェロニカ(スライム)

空色のジェル状モンスター。
レン德里ックの【タイム】で
仲間になった。

エスティア

ベテラン魔法使い。
背丈ほどもある杖を愛用。
かなり人見知りな性格。

アニエスカ

冥界にいる「精霊の護り人」。
見た目のわりにおっちょこちょい。

ヴェロニカ

レン德里ックの【タイム】で
人型に進化した、
元スライムの「魔物っ娘」。
見る人すべてが惚れ惚れする
ほどの可愛らしさ。

レン德里ック・ラ フォンテーヌ

本作の主人公。魔物を仲間にし、
進化させる特殊スキル
【タイム】を持つ。
最強の冒険者になるのが夢。

主な登場人物

序章 異世界オーギュスタット

「うわあああああああ!!?」

視界に一瞬、鉄の箱が見えた。
次の瞬間。

激しい衝撃が全身を襲い、いつの間にか俺は宙に浮いていた。

——人間は空を飛べるのか。

そんな場違いなことを考えていたのだが。

もちろん一介の人間たる俺が、物理の運動法則に逆らえるわけもなく。

すぐさま地面が近づいてきて、グチャツとかメキツとかいう、R15な音が体内に響いた。

「きゃあああああ!!?」

「ひ、人がはねられたぞ!!」

「轢^ひき逃げだ!!」

「きゅ、救急車と警察を呼べ!!」

いきなりの非日常的な光景にパニックになる通行人たち。

その叫び声も、次第に他人事のように感じられてくる。アスファルトの上の血溜まりの中で、俺の意識はブツツリと途切れた。

……一度でいいから、超絶美人で性格のいい女の子と付き合ってみたかった。

+

さて、かくして俺、竜胆冬弥（高校三年生男子）は短い一生を終えたわけだが……死ぬにあたって、一つだけ思い残したことを述べておきたいと思う。

二十一世紀末に日本の平均的な中流家庭に生まれ、文武両道を高い水準で保っていた俺には——悩みがあった。

それはすなわち——。

彼女ができない。

自分で言うのもどうかと思うが、髪はいい匂いがするし、運動神経も悪くないと思う。

だが好きになった女子に告白してみれば、次々に大量の魚雷を食らうかのようにことごとく撃沈された。

一応そういうことに聡い友達数名曰く。

「あー、お前なら、まあそのうち彼女できるだろ」

「今はたまたま運が悪いだけだろ」

「つてか不安なら、出会い系に登録しろ、出会い系に」

褒め言葉とも励ましともわからない言葉を頂いた。

つまり俺には彼女ができる可能性はそれなりにあるというわけだ。

そう期待して学生時代を過ごしたのだが、なぜか最後まで撃沈され続けたのであった。

そんな現実（リアル）に絶望した俺の目に、ある日留まったのは、VRMMORPGを題材にした某アニメーション。

俺がそのアニメを見たのは、テスト勉強が深夜まで続いた時のことだった。

五感をすべて駆使してプレイするVRMMORPGというゲーム世界で、主人公はリーダーシップを発揮して様々な困難（困難）を猫耳アバターのヒロインと共に乗り越えていく。

そして、ヒロインは主人公に惹かれ始め……。

ゲーム世界で結婚し、なんと現実の世界でも結ばれてハッピーエンドという、ファンタジー・SF・恋愛の要素を兼ね備えた神アニメである。

コレを見た時、俺はビビッときたね。俺に必要なのはこれだ！と。

俺は幼少期からファンタジーものが大好きで、猫耳や犬耳から、スライムっ娘やサキュバスっ娘

までイケるクチだったから、そういう要素があつて、しかも現実で恋人もできてしまうVRMMORPGの物語には、すぐにのめり込んだ。そのアニメ以外にも、VRMMOを題材にしたライトノベルやアニメに、片っ端から手を出したのだ。

そして、あの噂——ゲーム業界大手のA社が、VRMMORPGを現実のものとすべく研究開発しているらしいこと——を耳にしたのである。しかも、なんと数年以内に実現可能だということではなか。

俺は狂喜した。

その日から、俺はVRMMORPGが実現する日を何よりの楽しみにして、毎日を送ることになった。

だが、半年ほど経ったある日の晩。

俺は高校に入った頃に両親を亡くしていたため、一人で寂しく夕食を食べながらテレビを観ていた。

アメリカで地震が起こったとか、フランスの映画スターが事故で死んだとか、どうも暗いニュースが多かったのでチャンネルを変えた。

そして目に留まったのは。

「——さきほど、ゲーム業界大手のA社が記者会見を行い、同社が開発を進めていたVRMMOR

PGのプロジェクトを中止する、と発表いたしました。同社によりますと、政府から中止の要請があり——」

そこから先の内容は、まったく耳に入ってこなかった。

VRMMORPG実現に向けた研究開発が中止になった。その言葉に、俺は頭の中が真っ白になつてしまったのだ。

——一時間後。

まだ完全には立ち直れていなかったものの、わずかに自分を取り戻してきた俺は、外の空気を吸おうと家を出た。

俺は家の前の歩道を、あてもなくふらふらと進んだ。

そして突き当たりのT字路まで来た、その時。

甲高い急ブレーキの音が聞こえて、何だ!? と思う間もなく俺は宙に舞っていたんだ。

そんなこんなで、冒頭に戻るというわけだ。

それにしても、あつけない人生だった。彼女もできなかったし。

……生まれ変わるなら、VRMMORPGが実現した未来がいいなあ。

「冥界に、一名様、ご到着〜っ！」

突如響いた大声に、俺は意識を取り戻した。

……冥界と聞こえた気がするが……。

見渡せば暗闇の中、半透明の人々が虚ろな目をして、いくつも列を作っている。列の先頭のすぐ先には大きな扉があった。

扉の上には「地球」という文字のイルミネーションが輝いている。

俺は思わず呟いた。

「……なるほど。確かに冥界っぽいな。それにしても、まさか本当に死者の国が存在するとは……」

「フハハハ！ そのとおりである！ ここは死者の国、冥界である！ ようこそ、竜胆冬弥！」

むさ苦しい大声と共に目の前の暗闇が歪み、少しずつ人の形を成していく。

現れたのは、スキンヘッドの大男。首から髑髏のネックレスを下げ、上半身は裸であった。

……すげえ筋肉だ。

「だ、誰だオッサン？」

「フハハハ！ 初対面の男にオッサンとは面白いのである！ 至極悲惨な理由で死んでしまった竜胆冬弥とかいう男がいると聞いて飛んで来てみれば……こんな若造とは……！」

なっ……人が死んで気落ちしているのに笑う奴があるか！

しかもむさくるしいぞ！ このオッサンの周りだけ、気温が高くないですかね！？

俺はそう突っ込みたい気持ちを抑えて、オッサンに訊ねた。

「なあオッサン？ 俺、こっからどうすりゃいいんだ？」

「フハハハ！ そもそもここは冥界である！ すなわち死者を審判する場なのである！ 人々はあの扉の奥で贖罪を行い、生前の罪の重さで死後の方向が決まるのである！ 善人は天国へ、悪人は地獄へ、そしてどちらでもない者はそのまま来世へと転生していくのである！」

……おお、なんかファンタジー小説でそんな設定読んだな……。

ってかこのオッサン、見た目も言動も冥界に似合わない気がするんだよねあ。

「フハハハ！ もちろん仕事中は冥界にふさわしいよう、姿を変えるのである！」

「心を読むっ！」

冥界にふさわしい姿……？ ってことは喋り方なんかもガラッと変わるのかな。

「フハハハ！ そのとおりなのである！」

「だから、心を読むなって言っているだろっ！」

……おかしいぞ、俺は生前はこんな激しいツツコミ役ではなかったはずなんだが……。

まさかのファンタジー展開に、少々心が躍っているのかもしれない。

「フハハハ！ やはりお主は面白いのである！ 気に入ったのである！ 何でもお主はVRMMORPGに似た世界に行きたがっていると聞いたのである！ 友好の証として特別にこれをお主にや

るのである！」

オッサンは俺に金色に光るカードを手渡してきた。

表面には「オーギュスタット専用」と彫られている。

「……まさか、そのオーギュスタットについていう世界に転生できて、しかもそれはVRMMORPGに似た世界なのか!？」

「フハハハ！ そのとおりである！ 通常、地球で生まれた者は来世も地球にしか転生できぬのだが、これは我輩のあつついあつつい厚意なのである！ 竜胆冬弥よ、返事は決まっておるな……?」もちろん決まっていた。

このオッサンは少タイラツとくるところがなきにしもあらずだが、これほど素晴らしいものをくれるのなら水に流してやろうじゃないか。

やべえ……来世のこと考えてたら、オイラ興奮してきたゾ。

友人たちにもう会えなくなると考えると悲しいけど、俺はもうこの現実を受け入れるつもりだ。

「フハハハ！ そう言うと思っていたのである！ ではしっかりと目を瞑るのである！」

言われたとおりにする。

「フハハハ！ 目を瞑ったな？ ではいざ行かん、オーギュスタットへ！」

突然、地面がなくなっただけのように感じられ、しばらくすると浮遊している感覚に襲われる。

だがどのタイミングで目を開けばいいかわからず、俺はずっと目を瞑っていた。

†

どれくらい経っただろう。

目を開くと、完全な暗闇なのだろう、まったく何も見えず、自分が本当に目を開いているのかさえわからなかった。

「――転生準備プロセス完了。個人認識プロセスへ移行します」

「つひやあ!？」

だから、頭の中に前触れもなく響いてきたその無機質な声に必要な以上に驚いて、つい変な声が出てしまった。

「――個人の認識を完了、竜胆冬弥と一致。潜在値の測定も完了しました。また、『金券』の所持により、基本潜在値15に加えて特別付与潜在値100、合計115が確定潜在値となります」

「えっ、えーと……何を言ってるんだ……?」

俺は頭の中で一方的に紡がれる言葉が理解できず、困惑してそう呟いた。

「ご質問なら受け付けますよ?」

俺の呟きに反応したらしい声が、今度は前方の暗闇から聞こえてきた。

そして少しずつ暗闇に人の形が浮かび上がってくる。

女性だ。

藍色のロングヘアーをサイドアップで纏め、肌の色は病的なまでに白い。顔はさすがファンタジーというレベルの美形。胸や尻の膨らみは控えめで、コンシェルジュ風の制服を着て、優雅に立っている。

「やべえ、ファンタジーすげえ！」と叫びたくなるのを辛うじて抑える。

「ああ、申し遅れましたね。私は生命の護り人、アニエスカと申します。生命の護り人とは、数多の生命を新しい生命へと繋いでいく存在なのです」

どこことなく名前がヨーロッパ風だったので、冥界でのネーミングも、地球と変わらないのかもしれない。

「今、これは何が起こってるんだ？」

俺は脳内で延々と無機質な声が流れている自分の頭を指差して言った。

「これは転生の儀式と呼ばれるもの。来世のあなたの情報を決定する場——えーと、地球世界で例えるのならば、ゲーム開始前のキャラメイクみたいなものだと思うてくれればいいですよ」

「へえ、じゃあ自分の外見を操作できたりもするの？」

「いえ、基本的には運次第です。もちろん、両親からの遺伝などの補正もありますが。また、このオーギュスタットの世界では『スキル』という概念が存在しまして——」

スキルも実装しているだ……!!



オーギュスタット世界は、俺の心を驚掴みにしたいらしい。

「スキルは『一般スキル』と『特殊スキル』があります。一般スキルは後天的なもので日常生活でも手に入りますが、特殊スキルは先天的なもの、つまり誕生時に付与されるのみです。この転生の儀式では、転生者はまず『オプション』を選択します。さきほど、確定潜在値——わかりやすくポイントと呼びましょう——というものが表示されたかと思います。オプションは、そのポイント内で自由に選択することができます。そして特殊スキルは、オプション選択後に余ったポイントを全消費して、生まれる瞬間に追加されるのです。ご理解いただけましたでしょうか。……では、オプション一覧のデータはこちらです」

いきなり俺の脳内に膨大なデータが表示された。

【性別変更 男↓女 5】

【種族変更 ↓人間族 10】

【種族変更 ↓猫人族 10】

……エトセトラ。

こんな感じでリストが並んでいる。

性別変更や人種変更って……思いつきり生命のルール無視してるよなあ。

「この末尾の、『5』とか『10』ってのは？」

「必要ポイント数ですね。ポイントをこれだけ消費して、このオプションを付与しますよ、ということですよ」

「なるほどなるほど……」

某野球クンボケの表サクセスの最初に得られるポイント制アイテムみたいなもんか？ 俺はよく恋人の好感度がわかるメガネを選択していたものだったなあ。それはさておき、俺はポイントを115持っているし、かなり余裕がありそうだ。

俺は頭の中でデータを下にスクロールしていく。

ふと目に留まるものがあつた。

……というか、目に留まらなければ詰んでるレベルのものだった。

【記憶継承 20】

これがないと、異世界転生なんてものは意味がなくなるんだよ。

俺あつての俺だからな！

ごめん、自分でも何言いたいのかわからん。

しかし、このポイント数20って……結構少ないか？ そう考えると、前世の記憶を持ってい

る奴はかなりいそうな気もするが……。

ちよつくら聞いてみるか。

「ちなみに、転生する人の平均所持ポイント数ってどんくらいなの？」

「そうですね……5〜10くらいでしょうか？ 多くても5くらいだと思いますが」

「えっ、ちよつと……俺100以上あるんだが!？」

なんかとんでもないポイントを得たらしい。

これも異世界転生モノの定番だよな。

「異世界行ったらチートでした」っていう設定は某小説投稿サイトでよく見たものだ。実は俺も執筆して投稿したことがあるが、一年経っても評価ポイントが10を超えなくて挫折したんだよな。

「えっ？ 嘘っ!？」

素が出てるぜ、アニエスカさん。

というか、俺が言うまで気づかなかったのか。

「ま、まさか……これはあの幻の金……券!? 私、この仕事をしていて初めて見ました……! ああ、感動を抑えきれない……っ!」

なぜか頬を薄いピンクに染め、びくんびくんと内股になって吐息を漏らしながら、劣情を誘う眼差しを向けてくる。

……なんだこれ。なんで興奮してるんですか、お姉さん!

美人にこんな風に見られているとなんだか落ち着かないので、俺は次の質問に移ることにした。

「金券ってそんなに珍しいの？」

扇情的なお姉さんは、信じられないという顔になって詰め寄ってきた。

おおつと、いい香りが……。

「め、珍しいというレベルではありませんっ! この金券の価値を知らないなんて罪ですよっ! いいですか？ 先月この仕事を辞めた私の先輩によるとですっ!」

退職とかあるのか……冥界って面白いな。

「ちよつと、聞いてますっ!？ で、その先輩によるとですっ、百年で一回でも金券を持つ転生者、金券さんに会えたら運がいいほう、ましてやこの仕事に就いている人は何人もいるのですからっ、金券さんを受け持った私は本当に、ほんと〜に、幸運なのです……っ!! 最後の金券さんが現れたのは今から二百年以上前なんですよ!？ あなた、一体これをどこで……っ!？」

あーオッサン。あーた一体何者だよ。これは少々、いや、かなり俺の手に余りそうな……。

「えーと、フハハハ! って笑うオッサンに貫った」

「え、えーと、あれ？ そんな人いたかなあ……?」

「あれ？ あの、存在感・命! って感じの人だぞ?」

「え、えー?」

オッサンが何者なのか、本気で怖くなってきた。こんなに貴重らしい金券をあつさり俺にくれる

ほどの人物なのに、冥界内に知らない人がいるってのはどういうことだ。

「わ、私としたことが、少々取り乱してしまいました……その人のことは私自身でのちのち調べます。では、儀式を再開しましょうか。【記憶継承】のオプションを行使、でよろしいでしょうか？」

「ああ」

アニエスカさんがこっそり小声で「記憶継承ってことは、もしかしてさっきの私の痴態が誤魔化せないってこと……？ はわわわ……」と言うのが聞こえたが、涙目なのが結構可愛かったので黙っておこう。

「ほつ、他にご希望のオプションはございませんかっ？」

俺はデータを、今度はじっくりとスクロールする。

「いや、ないな」

他のオプションをつける必要はなさそうだった。

特殊スキルのほうに惹かれるからなあ。

だって「スキル」だぜ？

まさしくVRMMORPGの醍醐味、神髄!! なわけ。

「では、残りはすべて、特殊スキルにということでしょうか？」

「ああ！」

「わかりました……あ、それと、特殊スキルの中にはステータス下降補正のつくものや、はつきり

言って迷惑だ、というものもありますが、もうキャンセルできないのでご注意ください」

「ナ、ナンダッテー!!」

いや、それ先に言えよ。

まあ、それでも俺の決心は変わらないけどな。

「といっても、そういったスキルは滅多にないので心配いらないですよ。では、そろそろ転生が始まります。あと完全に私用ですが、記憶を継承するのならば来世で私のことも覚えているはずですよ。もしまた冥界にいらっしゃったら、ぜひ私のところへ遊びに来てくださいね。では、ご武運を」

そう言うと、アニエスカさんは少しずつ暗闇に消えていった。

それと同時に、俺の脳内に、無機質な声がまた響いた。

「――転生プロセスを開始します」

すると足元から光が溢れ、俺はその光に吸い込まれるように落下した。

「うわああああああああああ!!」

落下の恐怖に思わず叫んでしまう。

そして視界は完全に光に包まれ、俺は意識を失った。

第一章 スライム・ヴェロニカ

「……あー、暇^{ひま}だわ」

窓際で頬杖^{ほつえ}をつき、退屈そうにあくびをしながら、金髪碧眼^{へきがん}の少年——俺は呟いた。

二階にある自室の窓の外に広がるのは、波打つ黄金のような麦畑。風が運んでくる心地よい麦の香りに、どこことなくノスタルジーな気分になる。

近くを流れる小川のせせらぎが、水を飲みに来る家畜や野生動物の鳴き声と共に聞こえてくる。時折通りすぎる人々に手を振りながら、俺は村を囲う森の向こうに聳^{そび}える山脈を見つめた。

ここロイム辺境伯領——通称ロイム村——は、ハルヴェリア王国北西部のベルガニー山脈^{みもと}の麓にある。そして今俺がいるこの家は、ロイム村領主の邸宅だ。

七年前、ロイム村領主のパブロ・ラ・フォンテーニュと妻エレネの次男として、俺——レンデリック・ラ・フォンテーニュは生まれた。

つまるところ、俺は絶賛七歳児なう、なのであった。

俺の父様はロイム村の領主だが、過去のとある魔物の討伐によって、フォンテーニュ辺境伯の

爵位^{しやくい}を賜^{たまわ}ったらしい。

だから一応貴族なんだよね、頭に「貧乏」がつくものの。

父様は、自ら進んで、しかも生き生きと畑作しているから村人にも好かれている。だから悪政領主に対する村人の反乱、とかいうありがちなイベントも起こらないだろう。森に囲まれていると不便だけど、RPGの最初の村ついでというイメージでとてものんびりしている。

牧歌的な雰囲気であるが、隣国である神聖皇国アドロワとの国境に近いためか、どうもここは地理的に重要らしい。

まあ、アドロワとの関係は今のところ良好みたいだから、軍事境界線っぽい物々しさはないけどな。

とはいえ、隣国の情勢が急変する可能性もなきにしもあらずだから、防衛として村人兼騎士たちが住んでいる。普段は耕作しかやることがないみたいで、彼らが毎日汗と泥に塗^{まみ}れてせっせと畑仕事をしている姿は見ていて飽きない。

国から派遣された騎士たちは、最初畑仕事を嫌がっていたらしい。だが自分たちで作った美味しい野菜を食べてからは意欲的になり、村人も今ではすっかり彼らを仲間として認めているのだそうだ。

そんなこんなで、今日もロイム村は平和なのであった。

ああ、あと俺の特殊スキルは以下のとおりだった。

〈ティムマスター 15〉
〈創造王 15〉
〈体術王 15〉
〈極限突破 20〉
〈王の系譜 20〉
〈冥界の加護 0〉
〈男は拳で語る 0〉
〈牡のフェロモン 5〉
〈絶倫 5〉

こんな感じで、スキルが俺の脳内に表示されるのだ。

一見強そうなスキルが並んでるけど……。

牡のフェロモンと絶倫ってなんですかね！ いや、確かに俺の夢は「彼女を作る！」なんだけども。こう客観的に見ると恥ずかしいよな……？

……いや、主観的に見ても恥ずかしいな。

とりあえず、まあなんだ、詳細は次のような感じだ。

■特殊スキル

〈ティムマスター〉
……一般スキル【ティム】追加。隷属状態下の魔物の進化は、希少なユニーク系統を必ず迎える。
〈創造王〉
……一般スキル【鍛冶】【錬金】【調合】【建築】【王級工房】【鑑定】追加。
〈体術王〉
……体力、筋力、敏捷にステータス補正極大。
〈極限突破〉
……パーティ全体に作用。己の限界を突破し、最上位スキルまで必ず到達する。スキルの成長速度が極大化される。
〈王の系譜〉
……王族に関わる運を高める。パラメータ補正【カリスマ極大】。一般スキル【指揮】追加。
〈冥界の加護〉
……パラメータ補正【魔力最大量極大】【闇系統魔法威力極大】【闇以外系統魔法威力極小】追加。
一般スキル【暗黒魔法】【混沌魔法】【煉獄魔法】追加。

〈男は拳で語る〉

……パラメータ補正【近接武器適性極小】追加。ただしナックル武器、遠距離武器は例外。

〈牡のフェロモン〉

……パラメータ補正【魅力極大】追加。一般スキル【甘いマスク】追加。

〈絶倫〉

……一部状況下でのパラメータ補正【スタミナ・体力極大】追加。一般スキル【精力回復】追加。

■一般スキル

【タイム】

……魔物を隷属状態下に置くことができる。ただし、隷属状態下に置くことができる数はスキルレベルの値まで。隷属状態下に置くためには、自らの優位性を示す必要がある。

【鍛冶】

……鍛冶の適性を持つ。

【錬金】

……錬金の適性を持つ。

【調合】

……調合の適性を持つ。

【建築】

……建築の特性を持つ。

【王級工房】

……鍛冶・錬金・調合・建築に必要な道具が揃った「工房」を出現させる。

【鑑定】

……武器・防具・装飾品の能力値の読み取ることができる。対象により範囲は異なるものの、人間や亜人、魔物の情報を読み取ることもできる。ある程度遠距離の離れた対象にも有効。

【指揮】

……指揮力が上がる。パーティ内の連携力、統率力が上がる。

【暗黒魔法】【混沌魔法】【煉獄魔法】

……【闇魔法】のユニーク上位スキル。

【甘いマスク】

……恋愛感情を抱かれやすい。

【精力回復】

……夜の営みの際、精力が尽きることがない。

【精力回復】の説明は何回見てもツツコミたくなる。まあ一部のVRMMORPGでは実際に夜のお行為ができるらしいですけどね、素晴らしいです。

問題は〈冥界の加護〉〈男は拳で語る〉のパラメータ補正だ。「極小」って……これ、どう見てもステータス下降補正スキルですよ？ アニエスカさん……何が「ステータス下降補正スキルは稀」だよ……二つも出てるじゃねえか！ ファンタジーの王道——剣と魔法のほとんどが死んでるじゃねえか！ 訴訟も辞さない……。

くそ……まあ〈冥界の加護〉については【闇系統魔法威力極大】があるからしょうがないと割り切ろう。普通の人は、こんなにたくさんスキル持てないらしいな。〈冥界の加護〉は簡単に言えば、一つ何かを極めるためには大いなる犠牲が必要ってことだな、たぶん。

でもなんとなく、あの変なオッサンが関係している気がするぞ。

いい人ぶって、実は厄介なモンよこしやがったな、あのハゲめ。

スキル欄を脳内でスクロールしていくと、次に表示されるのは自分のステータスだ。

レンデリック・ラ・
フォンテーニュ

冒険者ランク：なし

ATK:	67
DEF:	45
SPD:	54
MP :	2149
LUK:	9999

ATK・DEF・SPD・MP・LUKはそれぞれ「ATTACK」攻撃力「DEFENSE」耐久力「SPEED」敏捷性「MAGICAL POWER」魔力量「LUCK」幸運度を表している。

LUKの値から、少なくともMAX値は9999以上だと予想できる。最初からMAX値のわけがないからな。LUKとMPはともかく、上から三つ目までの値がいずれも二桁である俺は、相対的に弱いのだと考えられる。

なぜならロイム村の、冒険経験のない一般的な成人男性のステータスがこちらだからだ。

村人A
冒険者ランク：なし

ATK:	300
DEF:	300
SPD:	300
MP :	300
LUK:	300

な、村人の平均と比べて、俺はATK・DEF・SPDの三つがかなり低いんだ。俺はまだ七歳の子供だからっていうのもあるのだろうが、このままじゃただの平均より弱い一般人となりかねない。

それにしても「なんだよこのLUKの値は」って言われそうだが、生まれた時からこうだったんだからしょうがない。あのオッサンから金券を貰うことができたからLUKの値が高いのか、LUKの値が高かったから金券を貰えたのか、どっちなのかは不明だが。

ところで、俺は村の外に出ることを両親から禁止されている。

というのも、ロイム村付近にはしょっちゅう周囲の森林からはぐれた魔物が出没するのである。子供にとってはたとえ最弱レベルの魔物でも命の危険があるから、十歳になるまでは子供だけで村の外には出ないように教えられているのだ。

まあ時々、ロイム村の南東にある都市、ハーガニーから冒険者ギルドの要請を受けた冒険者が魔物を引きに来るため、強力な魔物はまず存在しないのだが。

だったら、俺七歳児だけ魔法のスキルとかあるから、弱い魔物くらいなら問題ないんじゃない？ ……ということで、魔物とエンカウントしてみたい。せっかくのVRMMORPG風世界に來ているのに、七年間も魔物遭遇なし、魔法使用なしのレベル1はありえないしな。そんなRPGがどこにあるんだよっていう。

七年間レベル1縛りプレイとか、そんなことしてる人がいたら見てみたい。

そこまでやり込んでたら廃人すら通り越してそうだから怖いけど。

「ねえねえ、デボラー。村の外に行つていいかな？」

「レンデリック様、それはいけません。外には魔物がたくさんいるのでございますよ」

今、俺の金髪を梳すいているデボラは、フォンテーニユ家唯一のメイドである。確か二十六歳だったか……。相当美人なんだけど、この世界では結婚適齢期が十五歳で、それをかなり過ぎていためになかなか嫁ぎ先が見つからないそうだ。日本なら二十六でもまだ早いほうだと思っただけだなあ……。

あと、七歳児のふりをするのは結構きつい。ついつい、普通に喋りそうになる。

言葉を喋れるようになった二歳児あたりはとくにきつかったぜ。うっかり変なこと喋って騒がれても大変だからな。

まあ、もう七歳になったんだから、少しは大人っぽく喋っても問題なさそうだが……。

「大丈夫だって。強い魔物はいないんでしょ？」

「弱い魔物でも、子供には十分危険な存在でございますから」

「誰かに一緒に来てもらえばいいんじゃないかな？」

「レンデリック様の外出を止めなかった、としてその人がパブロ様に叱られてしまいます」

「僕が怪我しなければ、大丈夫でしょ？」

「でしたら、パブロ様に直談判してください。メイドの私に言われても困ります」

「何度もお願ひしてるんだけど、その父様に、許可してもらえないんだよー」

「そうでしょう。それにレンデリック様は領主家の次男なのですから、あまり無理せず、もつと体を大事にしてくださいね」

「うーん……」

というわけで俺は、家族や村人の目を盗んで村の外に出る隙を探しているのだが、これがまた難しい。ロイム村を囲むように大きな防壁が立てられていて、唯一の出入り口は村人が交代で見張りをしているのだ。外出するという趣旨の書き置きはすでに準備してあるのだが。

あとはタイミングの問題であつた。

+

翌日。

「父様」

朝食を食べるために家族一同がリビングに集まっていた。上座に父様、その隣に母様、向かい側に上座の方から順に、十一歳で長男のアルフォンソ、俺、三歳で三男のミケーレが並んでいる。

「なんだ？ レンデリック」

「あの……村の外に行ってみたいのですが」
直談判である。

「ならん。前から言っているだろう？ 子供だけでは危険だから十歳になるまで待て」
こういう答えは予想していた。

「ですが、護衛として誰か連れていけば大丈夫ではないでしょうか？」

「自分の息子だからといってそれを許可したら、村人に示しがつかん。それに、もしお前が傷つくようなことがあつては……」

父様は、まず第一に村全体のことを考える。そして次に、母様や俺たち家族のことを考える。

いつも村のことを最優先に考え、我が子だからといって優遇したりしないから、村人たちからの信望も厚い。

「しつこいぞ、レン！」

アルフォンソがいきなり立ち上がり、俺の胸倉を掴みあげて叫んだ。

「お前はいつもそうだ！ いつも村の外、村の外!! わがままもいい加減にしろ！」

「にいたまー、おこっちゃダメだよ？」

「ミケーレも黙れ！」

「ひっ……」

ミケーレはアルフォンソの鬼のような形相に怯えて泣きそうになっている。ミケーレは関係ないだろと思ひ俺はアルフォンソを睨むが、アルフォンソは俺のそんな態度にますます腹が立ったよう。

「レン、お前、領主の子だという自覚をもっと持ったらどうだ！ それができないような奴は、この家にいる資格はない！」

「おい、アルフォンソ！」

父様が窘めるが、アルフォンソはそれがまた癪に障ったようで、今度は父様に怒りの矛先を向けた。

「父様も父様だ！ なぜ領主のくせに村人に交じって畑仕事なんかしてるんだ！ 領主は領主らし

くしていればいいだろ!? 見苦しいんだよ！」

「なっ……」

父様は絶句して、悲しそうな顔を見せた。

村人と一緒になって畑仕事をしているからこそ、彼らの人気を得て、政務もスムーズになるということをアルフォンソはわかっているのだろうか。領主だからといって、屋敷に籠って書類仕事さえしていればいいというわけではないのに。

「アル！ いい加減にしなさい！」

それまで黙っていた母様の、堪忍袋の緒が切れた。普段は穏やかな碧い瞳で、アルフォンソを鋭く見据える。

「優れた領主とはまず民のことを考え、民と触れ合い、そして民の信頼を得る人だということが理解できないのですか!？」

「……フンッ」

アルフォンソは朝食を残したまま、俺を睨みつけてリビングを出ていった。
リビングには、ミケーレの泣き声だけが響いていた。

その日一日、屋敷の中は気まずい雰囲気だった。

自分の発言が原因だったから、俺はちよつと落ち込んでいた。

「レン、入りますよ」

自室でベッドに仰向けになっていると、扉の向こうから母様の声がした。母様が俺の部屋まで来るのは稀だったので驚き、すぐに起き上がって扉を開けた。

母様は金色に輝く長い髪を背後に揺らして入ってきて、ドレスに皺しわがつかないように手で押さえながら椅子に座り、こちらをまっすぐ見て言った。

「レン、あなたの夢は冒険者になるか、あるいは世界中を旅することよね？」

「え？」

唐突な質問にポカンとする俺を見て、母様はクスクスと笑った。

「あなたがお父様の書齋しよさいに入り浸ひたっていることは屋敷の中じゃ有名よ？ それで私は、あなたが一体どんな本を読んでいるのか気になっちゃってねえ……。調べてみたら、S級冒険者、ギルバートの苦難の旅の記録だったり、王都三つ星レストランガイドだったりするじゃない？ 他にも似たような本が書齋のあちこちに何冊も散らばってるし……。だから私はね、あなたがこの村を出て、世界各地を見て回りたいと思ってるんじゃないのかしら、と予想してたのよ」

やはりバレていたか。というのも当たり前で、あえてその手の本を散らかしておいて俺の意思をアピールしていたんだけだな。

「……あはは、そうです。僕は冒険者になって世界中を旅したいのです。いろんな場所に行って、いろんな人と出会って、話して、いろんな文化に触れて……。そういうことに、無性に憧あこがれるんです」

「わかるわあ、その気持ち」

母様はウンウンと頷うなずいている。

「私も、結婚してこの家に嫁よめぐ前は、冒険者として生活していたからねえ……。確かに、この村はのんびりしていて暮らしやすいわ。……でも悪く言えば、ここは閉鎖的なよね。……村の外がどんなものなのかを知らないまま一生を終える人も多いし、そういう人は個人的には可哀想だと思っているのよ。だから、もしレンが世界中を見て回りたいて思うのなら、私はまったく反対しないわ。むしろ、応援するわよ？」

母様は聖母のような微笑みを浮かべる。

「……だから、アルフォンソの言ったことは気にしないで。アルの言動は頂けないけど、あの子の気持ちもわかる気がするの。だから今は心配しなさんな？ ……もし、森に行くのなら、村の外れにある涸かれ井戸いどを使いなさい」

「涸れ井戸……ですか？」

「ええ。その井戸の底には村の外森に通じている、緊急用の隠しトンネルがあるのよ。……これは、私も最近知ったんだけどね。……だから、パプロとアルに感づかれないようにうまくやるっていうなら、私は何も言わないから、自由にいつてらっしゃいな？」

母様……なんという良妻賢母。

「わかりました！ では早速ですけど、今日行きます。どうすればバレずに家から出られるでしょ

うか？」

「あら、簡単よ？ 深夜に行けばいいじゃない」

いやいやいや、何を言っているんだ！

やっぱり良妻賢母ではないかもしれない。

別に俺は深夜に外に出るのが怖いわけではないが、七歳児に深夜の外出を勧める親がどこにいるのか。

「アドベンチャーよ、アドベンチャー。スリルがあつていいじゃない」

「……」

無言でジロツと睨むと、母様は慌てて自分の顔の前で手を振った。

「いやねえ、冗談よ、冗談！ でも、深夜でもほんとにいいわよ？」

それから声のトーンを落として、内緒話でもするように囁いた。

「だって……レン、あなた魔法も使えるんじゃないの？」

「な、なっ……」

俺が魔法を使えることは家族の誰にも喋っていない。

この世界、魔法が使える者はそこまで多くないそうだ。だから魔法のことで注目されると面倒くさいと思つたし、何より、ひがみっぽい性格のアルフォンソが魔法を使えなかったからな。

「この前ミケーレが怪我した時に、私初めてレンの前で回復魔法を使つたけど、あなた全然驚いて

なかったわ。普通、初めて魔法を見た人は、みるみる傷が塞が^{ふさ}っていくのを見て仰天^{きょうてん}するものよ？

だから私は、レンが魔法を使えるんじゃないかと思つたの。それに私、この前の夜中に見ちゃったのよねー、庭であなたが何やらブツブツ呟いて、闇の魔法らしきものを使っていたのをね」

母様は何でもお見通しつてわけか？ その洞察力には驚かされる。さすが母親だ。

「一応森の魔物は、強い個体は間引きされているからね。攻撃魔法が使えるさえすれば、乗馬よりも安全よ？」

いやいや、乗馬と違って、魔物は死の危険があるんだが……。ああ、でも日本でも競馬の騎手で落馬して死んだ人がいるって聞いたことがあるし、大差ないかもしれない。

「違うわよ、馬は凶暴な肉食動物だから、そこらへんの魔物より厄介^{やっかい}なのよねえ……」

なんと、ここでは馬は肉食動物らしい。さすがファンタジー世界。

でもそれじゃあ、乗馬の初心者はどうやって練習するんだろうな？

「初心者はまず草食動物のロバで練習するのよ。ロバはおっとり屋さんだから、スピードも遅いし安全でしょ？」

どうやら、母様もあのオッサンと同じく俺の心が読めるらしい。一体どうやってるんだろうか。

ということ……その晩。

俺は寝たふりをして、父やアルフォンソ、デボラも寝たであろう深夜に起きた。念のため書き置きを枕元に残し、ベッドの脚に固く結びつけたロープを窓から垂らして静かに降りた。帰りはこれを伝って部屋に戻る必要があるから、ロープはそのままにしておいた。真下は幸い窓もなく壁があるだけなので、誰かに発見されることもないだろう。

外は暗く、月の光だけが唯一の灯りだった。日本と違って、街灯も懐中電灯もない。松明たいまつは念のため持参したが。

だが、俺は怯えるどころか、魔物とのエンカウントを考えてワクワクしていた。

スキップしながら例の涸れ井戸にたどり着き、松明を灯して、持参したさっきとは別のロープを垂らし底へと潜っていく。

井戸の中は暗くジメジメしていたが、それでいて神聖な空気を孕はらんでもいた。おそらく、村の外から魔物が入り込まないように結界が張られているのだろう。そして、この神聖な空気というのが、いわゆる聖気というやつだ。魔力とは逆の存在で、聖職者にしか扱えないらしい。村の教会の神父様が結界を張ることができるというような話を、以前母様が誰かから聞いたことがあったな。

井戸の底に降り、横に延びるトンネルを二十分ほど進むと、木や土の匂いが強くなってきた。そしてとうとうトンネルを抜けた。

そこは深い森だった。

密生した木々の葉の隙間からは、わずかに月光が差し込むのみ。歩く度たびに腐葉土ふようどの湿った香りが強く感じられる。林床りんしょうはコケと落ち葉に覆われていた。

少し行ったところで振り返ると、涸れ井戸のトンネルの入り口が見える。洞穴ほらあなのようになっているが、魔物の侵入を防ぐ結界が張ってあることを知っているからか、不気味には見えなかった。

俺は暗い森の中を少しでも照らそうと、松明に火をつけて高く掲げた。

何も見えない森の奥から、何者かに見られている気がする。聖気を嫌がって出てこない魔物だろうか。結界はトンネル内だけでなく、周囲にまで展開されているのかもしれない。

俺が使える魔法は初期レベル、すなわちLv1で使える、【暗黒魔法】の【暗黒魔法】、【混沌魔法】の【混乱の闇】、【煉獄魔法】の【煉獄弾】の三つだ。

準備は万端。

俺は少しずつ、まっすぐに森の奥へと進む。

しばらくして、目の前の草むらがガサガサッと揺れ、小さな何かが現れた。

それは、身長五十センチメートルほどの、毒々しい色が混ざった空色の流動体。

ちなみにセンチメートルはこの世界の尺度で、名前からわかるとおり一センチメートル＝一センチメートルだ。一メートルは、もちろん一メートルである。

顔も目も、手も足もない物体。だが完璧に俺を認識しているようで、迷わずこちらに向かってくる。体表からグボグボッと酸らしき泡をまき散らしていて、腐臭を放っている。体の奥に、紫色に

光る小さな丸い石みたいなものが透けて見えた。父様の書斎にあった書物から得た知識によれば、あれが魔核だろう。

——目の前にいるのは、おそらくスライムだ。

目も口もなく、プルプルツとしておらず、人懐こい笑顔もない。だが、俺は目の前のモンスターがスライムだと確信していた。

俺は言いたいね。誰だ、スライムは可愛いなんて言った奴は！ と。これほどまでにリアルで気色悪いとは、誰が予想しただろうか。

だが、今はそんなことを言っている場合ではない。まずは目の前の魔物をどうするかだ。

「——光を呑み込む暗黒より生まれし闇よ、小さな球と成りて敵を穿て——暗黒弾!!」

俺はすぐ前に迫ったスライムに向かってそう唱えた。俺の頭上にメロンほどの大きさの魔力のかたまりが現れ、スライムに向かって飛んでいく。

向こうもまさかこんな子供が魔法を使うとは思っていなかったのか、もしくは単に知能がないだけなのか、暗黒弾を正面から食らった。

スライムは暗黒弾に体を削られて縮んでいく。

うん、すっかり魔法が効いたようだ。今度は【煉獄弾】を使ってみる。

「——地獄の業火は煉獄なり。煉獄の炎よ、小さな球と成りて敵を焼き尽くせ——煉獄弾!!」
さきほどと同じく頭上に現れた炎のかたまりがスライムへ飛んでいく。

今度はスライムも避けようとしたが、煉獄弾のほうが速い。結局スライムは煉獄弾をまともに食らい、激しく燃えた。唯一残って点滅していた魔核も燃え、最後には灰になった。

「おお……」

俺は夢にまで見た魔物との戦闘と魔法の発動に、言い表すことのできない感動を覚えていた。魔法は詠唱に時間がかかるのがネックだが、それがファンタジーの醍醐味であり、初陣の興奮もあって今はそこまで気にならなかった。

しかし、MPを消費した感覚がない……いや、パラメータ補正【魔力最大量極大】があったから、初期レベルの魔法二発ぐらいでは消費したうちに入らないのかもしれない。これなら、何体でもいいけそうだな。

しばらく森を進んでいると、二体目のスライムと遭遇した。

今度は【煉獄弾】、【暗黒弾】の順で攻撃し、やはり二発で倒した。

三体目のスライムは、【混沌の闇】を使用してから【暗黒弾】で攻撃した。【混沌の闇】で混乱状態になるとスライムは動かなくなったので、前の二体よりもさらに簡単に倒すことができた。

二時間ほどスライムを倒し続けていただろうか。

『——スキルがレベルアップしました。確認してください』

突然、ゲームでおなじみのそんなアナウンスが脳内に響いた。ステータスを確認してみると、【暗黒魔法】、【混沌魔法】、【煉獄魔法】がそれぞれレベルアップしていて、新しく【暗黒魔法】の【暗

闇可視化】、【混沌魔法】の【無我の暗闇】、【煉獄魔法】の【煉獄の壁】が使えるようになっていた。おそらく、普通の人はこんなに早くレベルが上がらない。もちろん、レベルが上がっていけば次第にレベルアップのペースも緩やかになっていくと思うが、たった二時間で1レベル上がるというのは恐ろしい話である。スキル〈極限突破〉のおかげだろう。

——何体目だろうか。

月光の下、現れたのはまたもやスライムである。月光を反射するヌメヌメとした空色の体表は、間違いなくスライムのもの。

だが、何かが違う。

酸の泡が沸き立っているはずの体表は、プルプルという擬音が聞こえそうなほどツルツルでテカテカしている。

そしてそのスライムは俺を見つめているかのように、じつとそこに留まっている。さっきまでとは明らかに雰囲気が違う。言うなれば、敵意を感じないのだ。

一つ、思い当たる節がある。

スキル【タイム】だ。確か、魔物にこちらの優位性を見せつけければ仲間にすることができるといふやつである。

ふむ、と小さく声を漏らす。確かに、この二時間で、両方の手足の指を使っても数え切れないほ

どのスライムを倒した。それにより俺の圧倒的な実力が示され、コイツに対して優位性を持つことになったのだろうか？

するとコイツはずっと俺を観察していた、ということなのか？　もしかして森に入った時から感じていた視線は、コイツのものだったのか？

まあ……とりあえず、今は目の前のスライムに集中しよう。

「えーと、お前のことは……スライム、って呼べばいいのか？」

空色のソレは触手らしきものを伸ばすが、逡巡したように一度止め、それからまた動かして、宙に丸を描いた。

「……？　それでOKってことか……？　じゃ、スライム。俺と一緒に来るか？」

突如、ソレは高く跳躍し、ベチャツと音を立てて俺の胸に張り付いた。うわわっ、やっぱ敵だったのか、と慌てる俺だったが。

脳内に、アナウンスが響いてきた。

『——スライムのタイムに成功しました』

脳内で自分のステータスをスクロールして確認してみると、俺の名前の下に「????」と未詳の名前が追加されていた。

なるほど、張り付いたのは、仲間になる意思表示だったのか。

ぶるんとして、しかもひんやりした感覚に少々驚いたのだが、なぜか不快には思わなかったし、